# ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2007 年 2 月 8 日
■連絡先　藤川博樹
〒 115-0045
東京都北区赤羽 1-48-3-203
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.301

## 2 月行事日程

**■ニュース編集**
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5 枚（2000 字）
小説：10 枚（4000 字）目安

**■締め切り**
2007 年 2 月 18 日（日）

**■購読料・年会費**
1200 円（年）
( 切手 80 円× 15 枚 )
郵便振替：東京 00170-1-18290

2006 年末、教育基本法改悪反対の国会前抗議行動に参加した。改悪は強行されたが、抗議行動の多彩さには感心した。中でもこの人（男性）は寒風吹きすさぶ中に、半裸のパフォーマンスで目立っていた。（N）

菊池恩恵氏より、お便りと切手カンパをいただきました。ありがとうございました。

◆日本経団連会長「御手洗富士夫」キャノン社長の「提言」の厚かましさったらないぜ！　残業代ゼロ（ホワイトカラー・エグゼンプション）企業減税（史上空前に儲けてるのに！）自民党への献金再開（儲けすぎなのに税金も払ってない銀行や外国からの献金の推奨や容認）などなど書ききれないよ。日本の経済界トップとして、日本が自殺と過労死が異常に多いことを恥じて反省対策も取らず、弱いやつは「どんどん死んじゃっていいよ」と提言したと同じだぜ。ずっと前は、財界にも、企業としての矜持や社会に利益を還元するような志を持っていた人もいたけどね。◆それで、うちはキャノン製品を買わない宣言。うちの 2 台目のデジカメがキャノンなんだけれど、これがまたやわで、買ってすぐに電池取り出し口が壊れちゃったの。長いこと、セロテープ貼って使ってた。重すぎてポケットには入らなかったしね。まあ、どんなに性能がよくて使い勝手がよくても、わたしは永久にキャノンは買わないよ。友だちにもどんどんキャノン不買をすすめるぜ！（つ）

◆物理学者・中川益夫氏の文学作品集の取材で、氏と共に南紀白浜へ出かけ、南方熊楠記念館、京都大学水族館、円月島などを周る。久し振りの快晴で、うららとした日和を楽しむことができた。（オ）

### 物理が苦徒（学徒）入会の弁解　中川益夫

一年以上前から「ふみの会」へ誘われて、昨年末ようやくの仲間入り。「読むだけ会員」の域を出ないと思いますが、交流の場ないしは構想の場として末席をけがすだけでもと希っています。悪しからず、ご海容ください。

先号の物理学者との紹介は僭称で、実は物理屋。放射線物性が専門の筈が、文学に手を染め、『奥の細道』や『カラマーゾフの兄弟』の謎等で小論を発表したところ、物理論文より多少の手応えが。

まだ「ふみも見ず」の皆様もよろしく。

# 街中の似顔絵師（八）

瀧本　文彦

僕は十年間ピアノを弾いて飯をくっていた。思うように弾けないとイライラし胃がチクチク痛むのだった。そして酒を飲む。ますます胃が傷む。何よりもマンネリ化する自分の演奏を恐れた。一日の仕事を終え趣味でピアノを楽しむのとは違い、ピアノを弾いてお金を戴き自分の弾くピアノを誰かが絶えず聴いている。同じ店で一年も弾いているとマンネリ化している自分がつらかった。

食欲がなくなり四日間スープだけ飲んでいたときもある。体力が落ちるとまずいと思い、食堂に行きメニューを見ていると吐き気を感じアパートに戻った。同じ曲を手を変え品を変えしてマンネリから脱出しようともがくのだった。楽しくもあり辛くもある十年だった。

十年間ピアノを弾いて飯をくったので、音楽とは縁を切ろうにも切れぬ関係になっていた。また高校時代の友達の中井君の存在がチラチラ頭をよぎるのであった。音楽に興味の無い女性と付き合いたいと思ったこともある。音楽に一言居士の女性を鬱陶しく思い、また恐れてもいた。自分は教養の無い話題に乏しい人間だ。音楽だけは経験からくる話したいこと、話せることがあるが大したことはない。底が浅く幅が狭い。無計画に森林を伐採しダムを造り、やせ細って夏祭りの御船も上るのに難儀する故郷の川の様なものだなと思いつつ今夜もビールを飲む……。

次の様な事件に遭ったことを話しながら思い出の小道を妙子さんと歩いた。

この路地で二人組みの強盗に胸ぐらをつかまれ暗い建物の隙間に連れ込まれて壁に押し付けられ金を出せと凄まれたため、仕方なくスーツの内ポケットから札入れを出し

「今、仕事中で此れだけしかないが」

と三千円の入った札入れを開いて見せると、「まだあるだろう全部出せ」と迫る。

「渋谷に遊びに来ているのではないんだ。これで全部だ」

と突っ張った。三十五歳位の丸刈りの浅黒い目に落ち着きの無い男の方がリーダー格で、二十歳か未だ二十歳になっていない男のほうは慣れていない様だった。付き合わされているというふうだった。

丸刈りが諦めて三千円を札入れから抜き出し、

「警察に言うとどうなるか分かるだろうな」

と言い放って去っていった。僕はワイシャツのポケットに六千円入れていたがこれは無事だった。彼らはどの方面に行くのか歩道に出て二人の姿を目で追いかけた。何と信号の有る横断歩道を渡り、僕と反対側の歩道を歩いて近くのバーに入った。直ぐ渋谷警察署に電話を掛け、事の顛末を話し犯人が向かいの道路の酒場に入った事を話した。

五分程でパトカーが来た。警官三名が店の中に入ろうとした。経営者らしい中年の女性が店から出て、警官に制服で店に入らぬよう抗議していた。警官は素早く制服を脱ぎ捨て、ワイシャツにネクタイで店に入った。店の従業員が裏口から逃げるよう指示したのだろう。裏口から出た所で逮捕された。店の出入り口を全部押さえていたのだ。この様なことは朝飯前なのだろう。

僕はこの光景を見とどけた後、店に戻りピアノを弾いていると、渋谷警察署から電話が入った。店長に事情を話し、

「今日の演奏はこれで終わりにしていただけませんか。警察署に行くと終電車の時間まで開放されないだろうと思います。この様な事になって済みません」

と謝った。店長は、

「しかたがないな。早く渋谷警察に行きなさい」

と言ってくれた。僕は警察署に向かった。

警察署に着くと、

「この二人の男に間違い無いな」

「間違いありません」

と言うやり取りをした。色々な書類に、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、事件に遭った時間や場所、どの様にお金を脅し取られたか、怪我は無かったか、どれ位の恐怖心があったか等、書かされ厄介なことにな

ったなと思った。

取調べ室でどすの効いた怒鳴り声が聞こえ、若い方は恐怖心とアルコールの飲み過ぎか、バケツにげえげえと吐いていた。丸刈りはこのような場所に慣れた者なのか、しらばくれている。丸刈りの方は酔っ払って車で駅に突っ込み執行猶予中だった。若い方は初犯だった。僕はパトカーに乗せられ、犯行にあった場所に行き、此処でやられましたと指しているところを写真撮影された。

この後が大変だった。霞ヶ関の東京地検に何度か呼び出された。渋谷警察署で犯行にあった事実を話し書類に書いた内容を、検察官に繰り返し話した。しばらくして霞ヶ関の東京地裁に呼び出され法廷に立たされたのである。

ピアノを弾いていた「タンポポ」に、丸刈りと奥さんが菓子折りを持ってきて、丸刈りが、

「大変な事をしてしまい済みませんでした」

と頭を下げた。奥さんは、

「怖かったでしょう、申し訳ございません。法廷で不利にならない様な発言をしていただけないでしょうか」

と謝りかたがた頼みにきたが、法廷では事実を其のまま述べた。丸刈りに実刑二年六ヶ月の判決が下った。奥さんは泣いていた。

裁判が終わって裁判官が席を立ち帰りかけたとき、僕は「裁判官！」と大きな声を出し呼び止めた。裁判官は此方を振り返ったが、すたすたと行ってしまった。僕は奥さんの泣き声を聞き一言裁判官に言いたかったのだ。

「たいした被害ではなかったので、あんじょうしてやってや」

と……。

妙子さんにこのような話をしながら路地を歩いた。妙子さんは黙って聞いていたが、デートには相応しくない話をしたなと今は思っている。

思い出の小道を歩き大通りに出た。右に折れ渋谷駅の方に向かった。妙子さんの歩く速度はやや速かった。僕は歩調を合わせ大股に歩いた。駅周辺の街は行き交う人で賑わしかった。春風春花春宵である。大都会のコンクリートジャングルの雑踏とは言え、春のそよ風が心地よい。僕は幸せだった。妙子さんの横顔を窺ったが、ごく普通の表情をして淡々と歩いているようだった。

「来週お会いしていただけませんか」

「いいですよ。会う場所は何処にしましょうか」

「上野公園がいいですね。上野駅の公園前の改札口でお会いしましょうか」

「桜が未だ咲いているかしら」

「三分の二程散ってしまったかなあ。桜の花が見れるといいですね」

「ええ……」

「何時に待ち合わせましょうか。十二時にしませんか」

「ええ、いいですよ」

僕は有頂天だった。行き交う人皆幸せそうだった。渋谷駅に着き、それぞれ帰る方向に行く切符を買った。妙子さんは妙子さんの住まいに、僕は僕のぼろアパートに帰るために。それぞれのホームに行くとき妙子さんは手を振った。僕も手を振るのだった。妙子さんは微笑んでいるように見えた。嬉しかった。僕は前向きの気持ちになりホームに向かった。

翌朝、何時もの先行きにあまり希望の持てぬ、限りなく単純に繰り返す宅地を掘っては埋め掘っては埋める生活に戻った。土を掘って埋めたとて、何も芽が出ず実も生らず、水道管を埋めて蛇口から水が出てもべつに驚きもせず当たり前の話。土から芽が出りゃ感動し、もっと芽をだせ大きゅうなれと声援を送り、お天道様に感謝もしようが、蛇口から水が出ても、ああ、出ましたねと言うほどの事。今日も宅地にスコップを突き立て足で踏んでは掘り返す。ツルハシを振りかぶり、ぐさりと土に打ち込んでも、秋に実る稲穂を夢見ることも無く只黙々と土を掘る。埋めた下水管から汚物が流れりゃ、ああ、きたねえなあと思いつつ、ちっとは人のためになってるかと流れる汚物を眺めつつ、今日一日踏ん張りまする。

僕は今日から、妙子さんのために頑張りまする。振りかぶるツルハシに力が入る。土に突き立てたスコップに掛けた足に力が入る。たとえ土から芽が出ずとも、上野駅の改札口で会う約束をしている妙子さんの顔が眼前に現れ、希望の芽が土の中から出てくるようで、春の風を感じつつ汗を流していると、何処からともなくメンデルスゾーンの「春の歌」が聞こえてくるようで仕事が楽しくなるのであった。

（つづく）

# 青い波頭と白い龍

第八回

藤川博樹

■選挙・クロイツェル

弓子が、布団の中からカセットプレーヤーに手を伸ばした。弓子は、テープを巻き戻し、前に進め、探したが、録音したはずのクロイツェルソナタは消えていた。

「あれ、おかしいわ。確かに録音したはずなのに」

ＦＭ放送でベートーベンの「クロイツェルソナタ」のハイフェッツによる演奏があり、弓子はエアチェックしてラジカセのボタンを押したはずなのに、いくら操作してもクロイツェルは出てこなかった。

そのあと、しばらくして二人が布団の中で抱き合っていて曲のことは忘れていたときに、急にクロイツェルソナタの最終章が鳴り響いた。誤って消されたテープの残りの部分にベートーヴェンの呼吸が残っていた。終楽章のプレストとともに二人の心の高まりが絶頂へ向かって行った。

「私たち頽廃しているんじゃないかしら」

ベトナム共産党の機関紙に、「頽廃との闘争は前衛党の歴史的任務」という論文が発表され、執筆者の名前をとって、フォン・ヒエン論文と呼ばれていた。

深い意味もなく、性は頽廃だと思われていた。常三は、夜、弓子のアパートに帰ってくるときに生きている実感と喜びを感じていた。頽廃だといわれていることと自分の感覚とのつながりがつかめず、論文で言われていることがよく分からなかった。アメリカ帝国主義の拝金主義的な世界観が世界中を支配しつつあり、性の商品化の進行と言われて頭ではわかる気がしたが。

深夜まで開票速報が続いた。

常三は、日頃の活動で疲れ切って人ごとのように聞いていた。

翌朝目覚めると、弓子が「共産党まけたよ」と言った。

翌日、学連に顔を出すと、氏家は「もう当分寮に帰られへん」と、目を伏せ首を斜め下に傾けている。伊藤が「無家君、ショックを隠しているんだろう」と目をしょぼつかせながら声をかけてきた。伊藤自身がショックを隠しきれない表情だった。常三は、そこまで二人がショックを受けていることに驚いた。政治や選挙というものにそこまで感情移入していて、肉体的に影響を受けて疲れ切った表情をしている二人を見て、自分の未熟さ、経験の少なさを思った。元首

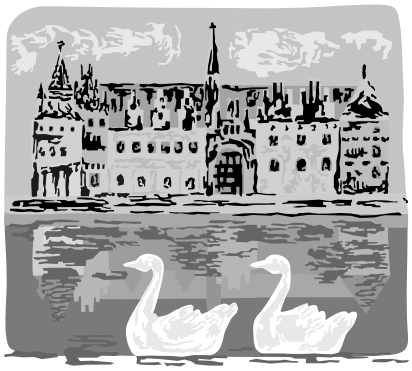
相の田中角栄が逮捕され、それを追求した野党の共産党が破れるはずがないという気持ちが活動家学生の中にあった。政治への批判の票は、結党されたばかりの新自由クラブに流れた。

選挙期間中の氏家は大胆で自信にあふれていた。「俺はまとめて面倒を見るんや」と、寮の後輩の四人部屋に入っていき、年下の学生たちを「君たち話があるんや」と言って集める。「君たち、今度の選挙ではどこに投票するんや」とすぐに主題の核心に入っていく。「いま、こういう時代やから共産党しかないんや」と言って、そこにいた学生たちに投票を依頼した。このやり方で、寮にいる地方からの学生たち数十人の票をまとめて集めた。

氏家は「百円や」と言って、コンビニで五十円のインスタントラーメンと五十円のソーセージを買ってきて昼食を食べている。「もう寮のみんなにあわす顔がないんや」とラーメン鉢に顔を突っ込んだ。

常三は合宿のときに文学部の池田が風呂の中で話していたことが印象に残って忘れられなかった。寝ているときに「誰だったかな。急に、『民主連合政府作るぞっ』て叫んだやつがいたな。夜中の真っ暗がりの中でかい声で叫んで驚いたけど、寝言なんだよ」と頭からお湯を被りながら。「誰だったかなあれは……？、塚田だ」

常三にとって政治的活動や選挙は義務でやるもので、嫌々ながらだった。学連の文化部の仕事で、文化系サークルの学生を組織することでかろうじて自分の活動の場を見つけていたようなものだった。常三は、ボヴァリイ夫人を読んだり、クロイツェルソナタを聴いているときの方が楽しかった。政治は常三にとっては市民的な義務であることは理解していても二義的なことであり、絵画や音楽、文学などの芸術にこそ生命を感じていた。自分は革命家や政治家には向いていない。



# 自転車

中井豊

子供の時分、和歌山県の山に囲まれた田舎にある父の実家に自転車が一台あった。それは小学校の教師をしていた伯父の通勤用で、休日になると伯父が丁寧に油を注し、ぼろ布で磨いていた。伯父はわずかな田で米も作っていた。

かつては、自転車は高価な乗物で、あるいは現在の中古車くらいな値段だったのではないかと思われる。旧制中学へは歩いて通える距離ではなかったから、祖父は二人の息子達――伯父と父のために自転車を買い与えなければならなかった筈である。二人は舗装などされていない長い道のりを五年間も自転車で通学したのである。家は山側にあったから、行きは下りだから楽だが、帰りはペダルを漕ぎ続けなければならない。身体づくりになったことだろう。

この伯父には一人の女の子と二人の男の子がいて、末が私と同い年だった。従兄弟たちは伯父や私の父が通った学校――もちろん新制の高校になっていた――へ、同じように自転車で三年間通ったのである。その頃は一家に四台の自転車があったことになる。当時でも時おり走るバスが朦々と砂塵を巻き起こすような道だった。雨で出来た水溜まりは道路のあちこちで穴ぼこになる。広い道でも砂利を撒いて整備されるだけだった。

伯父の家へは父に随いて汽車とバスを乗り継いで行く慣わしだった。家の近くの車一台がやっと通れるくらいの細い田舎道に入ると、田圃で働くどの夫婦も鍬の柄に顎をのせて此方を眺めていた。歩きながらそのことを話すと、父は面白そうに笑った。土地で育った父には、それらの人達が誰なのか判っていただろうが、面倒なのか挨拶はしなかった。

父は私をこの家に預けて帰ってゆき、数日して迎えにきた。あまり長くいると、さすがに母親や妹のいる自分の家が恋しくなり、様子を見に来てそのまま帰ろうとする父に泣きついたことがあった。もう真っ暗な夜になっていた。いったん私を置いて自転車で去った父は、気になったとみえて連れ帰りに戻ってきた。戻って来る自転車のランプの明るさを何とはなしに思い出すことができる。

伯父の家へ一人で行くことになったのは、小学生五年生くらいからだったか。せいぜい二時間ほどの旅だったけれども、ちょっとした冒険だった。バスを降りて静かな田圃に囲まれた道を一人で歩いていると、地元の腕白達が後をつけ、縄張りを侵された猿の群れのように小石を投げて威嚇してきたこともあった。

自転車の後に乗り、帰りのバス停まで登校する従姉に送ってもらったことがある。まだ私は小学生だったと思う。颯爽と高校へ行く従姉が頼もしかった。てくてく歩いていて、ちょうど下校途中の従兄に出くわしたこともあった。彼は私を乗せて上り道を当然のように自転車を漕いで帰った。

家に自転車がなかったので、私は同級生の自転車を借りて練習した。自分が強引だったのか、友人達が鷹揚だったのか――多分、その両方だろう。小学生の間、自転車を持っている友人を見つけると、「僕が運転する」と言って友人を後に乗せて街中を走り回った。

或る夏の夜、駅で夜勤につく父に母が夕食を届けて帰り、

「お父ちゃんが中古の自転車を買ってくれるそうだから、見に行っておいで」

と言う。直ちに家（官舎）の裏口からプラットフォームへ出て、駅員室の前へ行くと、汽車を発車させた直後で緊張が解け切れないまま、制帽をちょっとアミダにした父がいて、そこに置かれた自転車を指さし、

「ランプも付けてある」

と言った。これを見た途端、

「これはいらん！」

という言葉が私の口をついて出た。なるほど電灯は新しそうだった。が、フレームを見ると、黒ペンキがコテコテ塗られていた。意に満たないものを買ってもらうのは後々よくないという気持ちで正直に言ったのである。無口な父は、

「そうか……」

と言った。

夜のプラットフォームを小走りに家へ戻りながら、駅構内の灯りが涙で滲んだ。父が差し出したプレゼントを喜々として受け入れられない悲しさで胸が一杯だった。

母親は、

「中古でも、あれではねえ」

と言ったが、この言葉は父に気の毒に思えた。もう沢山という気持ちだった。

親子というものは、強烈に「一体感」を求めるものらしい。親にせよ、子にせよ、それが存在をおびやかすほど強い本能だと知らず、意識もしない。そのため、期待をコントロールしなければ傷つけ合うことになるという事実に、時間を経て初めて気付くのかも知れない。

我が家に自転車が来たのは、妹が中学生になってからだ。買ったいきさつは知らない。すでに高校生になっていた私は、妹のものでもあり、大した感慨もなく、それでも時々その自転車で遠乗りした。

私は自動車の運転免許を持たない。自転車と違って、自動車は借りて乗るわけにゆかない。それで、必要なときは友人に頼む。もっぱら、娘達が高校への通学に使ったまま家に置いていった自転車で畑へ出かける。今や貴重品でない自転車が自分に相応しい乗物という感じである。

混沌市凡日録　22

# かぐや彦

蒲原直樹

渾沌市田楽町屯田通りの家具卸商「でんがく堂」の一人息子小太郎は未熟児で難産でなかなか育たず、父親の文太郎も心配だった。それが小学校に上がる頃になると、体は丈夫になったものの別の心配が出てきた。

「小太郎ちゃん、いつも何かと話してるの、でも誰もいないのよ」

古株の女性従業員がこう話すように、小太郎は一人遊びばかりする子どもになったのだ。

「小太郎、たまには表に出てお友達と遊んできなさい」

母親にそう言われても小太郎は黙って首を振るだけだった。かといって、仲間はずれやイジメにあっているわけでもなさそうだった。文太郎は小学校の担任や教頭とも話してみたが、とくに異常な子だとは言われなかった。

（赤ちゃん時代が長かった分、あの子にはなにかの力があるんだろう。凡人が見たら欠陥かもしれないが、欠けている部分というのは逆に見れば能力だからな）

文太郎はそう考えて自分を納得させた。

ある日、いつものように家具倉庫の片隅で一人遊びをしている小太郎の前を通りかけた文太郎は、息子の周囲に異様なものを見た。それはキラキラ光る金属かガラスの雲のようなもので、はっきりした形にはなっていないが人影のようにも見えた。

「なにしてる、小太郎？」

文太郎が叫び、小太郎が顔を上げると光る雲は周囲の家具に吸い込まれるように消えた。

「今のはなんだ？……おまえ、いつもあんなのが見えるのか？」

「うん」肩をゆすって尋ねる父親に、小太郎は軽くうなずいた。

「ボクが遊んでいると、いつも話しかけてくるんだ。うるさいからあっち行け、って言っても行ってくれなくて、いつもこまってるんだ。パパが来てくれてよかった」

「そうなのか？　あのお化けは、おまえが呼んだんじゃないんだな？……呼ばないのに来るんだな？」

「そうだよ、ボク、あいつらうるさいから嫌いなんだ、呼ぶわけないじゃん」

息子の答えを聞いて文太郎は少しホッとした。そういうことならまだ打つ手がある。

文太郎はさっそく近所の寺、渾沌南寺を尋ねた。若住職の寒蔵は彼の中学時代のクラスメートだ。話を聞いた寒蔵和尚は渋い顔をした。

「ほんとかそりゃ？……しかし、うちは弘法大師を開祖にもち、不動明王や金毘羅様を祭ってはいるものの、住職がこのワシだからな……おまえも知っての通りの生臭坊主で、法力なんてものは持ち合わせがない。テレビ局に情報提供して専門家を呼んでもらったらどうだ？」

「そんなことが出来るんなら苦労するか、相手はオレの子どもなんだぞ。おまえでいいからなるべくありがたいお経を読んでつき物を落としてくれ」

「それじゃあオヤジも連れて行くか」

その日の午後、寒蔵と老和尚が連れ立って「でんがく堂」にやってきた。彼らは年代ものの仏壇が置かれた仏間に入り、仮の護摩壇を作って小太郎を座らせ、護摩木を炊いて降魔経を読んだ。小太郎はきょとんとしていたが、父親に命じられたとおりにおとなしく座っていた。

いつになく熱心な読経が始まり、それはどんどん大きくなった。周囲の者には、二人の僧侶の意思とは別のところで何かのエネルギーが滞留しているように感じられた。読経が始まって三〇分、聞く者がしびれを切らしたころ、護摩壇の煙が大きく揺れた。それは天井近くで渦を巻き、やがて薄黒い影の塊に変わった。僧侶たちはその影を上目遣いに見ながら、さらに読経の声を高めた。

次の瞬間、ドーンという音とともに影が破裂し、護摩壇と僧侶を吹き倒した。仏間にはもうもうと灰がたちこめ、咳き込む僧侶たちはもう読経どころではなくなった。天井からやがて大きな高笑いが響き、黒い影はどこかへ消えうせた。僧侶も小太郎も、横で見ていた文太郎と妻もただ呆気にとられるだけだった。

「どうやらワシらの手には負えん相手らしい」

寒蔵和尚は素直に敗北を認めた。

「だったら本山に頼んでそれなりの人をよこしてくれ、お布施ははずむ」

「わかった。本山に問い合わせてみる」

二週間ほどして、中越方面から偉い坊さんが来た。千日回峰を三回もなしとげたという大阿闍梨で、本山周囲の町では生き仏とされている人らしい。彼は渾沌南寺の連絡が来る前から「生死をかけた法難がやってくる」と予告し、この依頼を斎戒沐浴して受けたという。しかしでんがく堂にやってきた阿闍梨はちっとも偉そうには見えない小柄なしわくちゃの老人だった。作務衣を着た彼はひょいひょいと上がりこみ、さっそく小太郎に尋ねた。

「坊や、その怪しいものたちはどこから来るのかね？」

「すぐそばだよ」少年は素直に応えた。

「空の上や地面の下に穴が開いてて、そこから出てくるんだ。ぼくんちとあっちは、つながっているけどちがうんだよ」

「そうかね、じゃあ、あっちのものたちと坊やは何を話すのかね？」

「あっちにおいで、って。ぼくはこっちの人間じゃないんだから、まちがってこっちに来ちゃったんだから、もどっておいでって。ぼく、いやだ、ってなんべんも言ってるのに、しつこいんだよ」

「なーるほどね、それで、そいつらはいつ坊やを連れに来るといったかね？」

「うーーんと……」

小太郎はしばらく考えてから応えた。

「次のシンゲツの夜だって。シンゲツってなあに？」

少年の応えはその場にいた者を凍りつかせた。月齢はすでにつき果てていたからだ。

仏間には「でんがく堂」ゆかりの人々が集まっていた。文太郎と妻、その両親、文太郎の妹夫婦、渾沌南寺の二人の僧侶、それに六人の従業員だ。

「坊ちゃんは誕生のときに永いこと生死をさまよわれたのです」

大阿闍梨は沈痛な面持ちで語った。

「その際に、異界のものに取り付かれてしまわれた。本来は生まれるはずではなかったが、しかし、坊ちゃんには生まれたいという強い意思があった。そうして運命に逆らい、二つの世界が交じり合ってこの世に生まれてきてしまったのです」

一同はごくりと生唾を飲んだ。信じられないことだが、この偉いお坊さんが嘘をつくはずはなかった。

「よいですか、今夜争うのは容易な相手ではありません。拙僧も法力をつくして戦いますが、みなさんも持ち場で全力をつくしてください」

でんがく堂の住居部分は生垣に囲まれた黒板塀の二階家だが、その塀のいたるところに護摩札が貼られ、犬走りには法灯が灯された。そして前後の入り口には焚き火が焚かれていて、それぞれの火には従業員たちが張り番をしていた。

家の中には注連縄が張られ、護摩の火が焚かれていた。護摩壇では三人の僧侶が高らかに金剛頂経を唱えていた。家族の者たちは次の間にいて僧侶たちを必死に拝んでいた。時計が午前零時を指す頃、異変が起きた。仏間の壁に穴が開いてそこから毛むくじゃらの巨大な腕が出てきたのだ。腕はまっすぐに眠っている小太郎に向かった。すかさず老阿闍梨が錫杖で打った。腕は風船のように破裂したが、その小片がヒトデのような形になってまた小太郎を襲った。阿闍梨は護摩札の束を口で吹き、札は一枚一枚が釘に変わってヒトデに刺さった。一同は息を飲んで見守るだけだった。

阿闍梨が気を放って壁の穴を封じ、僧たちの読経が一瞬停まった。その隙を突くように畳が跳ね飛び、今度は床から真っ黒い影が噴出した。電気も灯明も一気に消え、仏間は闇に閉ざされた。その後のことは誰も覚えていなかった。

雨戸の隙間から漏れてくる朝の光に目覚めた一同が見たものは、めちゃめちゃに破壊された仏間とそこに倒れて息絶えている大阿闍梨の姿だった。しかし小太郎少年は元のままの寝床で、すやすやと安らかな寝息をたてていた。人々は大阿闍梨の徳をたたえるとともに、

「おとぎ話のかぐや姫は拉致されたが、渾沌の『かぐや彦』はのこった」

と噂した。

# 小説・一人ぽっち

内田幸彦

## （十四）退　職

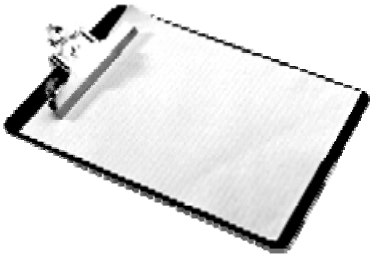
会計の仕事は死ぬほど厭だったが、すぐには辞められない。《あいつは仕事が出来ず辞めた》と思われるのは片腹痛い。生活の事もある。どうせ永くいる気はないものの、会計の仕事が一人前になるまでと心に決めている。

そう決めていても、計算が合わない、帳簿のつけ方が判らない。学校で習った商業簿記とは違い、会社簿記は複雑なもので伝票の作り方や記帳が急には憶えられそうにない。毎朝、家を出る時から足が重く、難波に着いても、地下鉄に乗るまでに、行こうか戻ろうか改札口を出たり入ったり、迷った末に心に鞭を打って出社したことも、休んで映画を見たこともある。

経理部の主任は村山といって、彦一より二つ上。経理にかけては右に出る者のいない切れ者、社長の懐刀と言われ、年上の課長連中さえ一目置いている。この村山は御機嫌を損ねると、毎月末の決算書を受け取ってくれない意地悪な男だそうだ。

彦一にも最初に一度切り記帳を教えてくれたが、二度目に聞くと、

「この間、言ったじゃないか。何度聞くんだ！」



と伝票を投げつけられた。《この野郎、今に見ておれッ！》と彦一は復讐を心に誓った。だが、早く仕事を憶え、一人前にならないと彼等に物も言えないと涙を呑んで通い続けた。

三ヶ月経つと、会計の計算と現金も、銀行勘定もピタリと合うようになった。《よし、これで対等に渡り合える》とその時を待った。

五ヶ月経った頃、全員が集まる朝礼で村山は得意気に社員に提案した。

「今日は提案があるのですが、就業十分前に事務所を掃除したらどうでしょう。気分一新して仕事に掛かると能率が上がると思うのですが」

切れ者の言うことだから誰も文句は言わないが、男女社員は浮かぬ顔を見合わせている。《よし此処だ。一度逆らってやれ》と手を挙げ、彦一は堂々と言ってやった。

「私は反対です。朝の十分は貴重で、そんな間はありません。それに、僕は会計の給料はもらってますが、掃除の分はもらってませんので」

社員一同わが意を得たりと、ほぼ全員が拍手で賛成してくれた。

見る見る村山の表情は変わった。顔面蒼白、目は爛々とし、口をガクガクさせるばかりで声にならなかった。誰も解散を言わないのに、社員たちは列を離れ各自の席に戻って行った。

その日の午後には、課長・重役連中らの彦一を見る目が険悪になった。《ははーん。村山の奴、もう上に報告しやがったな。ざまぁ見ろ》と彦一は腹でせせら笑うのだった。これで辞めるキッカケが出来た。あとは「事態を見て」と彦一は思った。

十日ほど経った朝、小使室で女子社員がシクシク泣いていた。次の日も、また次の日も。

彦一が不思議に思って訊ねると、女子社員は泣きじゃくりながら、

「外田さんがお掃除を断ったので、

それが私たち女子社員に廻って来たのです」

「毎朝、女の子が小使室で泣いているじゃないか。何故？」

「村山さんが点検に来て、机が歪んでるの、窓ガラスが曇っている、机に雑巾の跡が残っているのと一々文句をつけ、叱るんです。私たちも好きこのんでやっている訳じゃありません。朝、眠いのを早く来てやっているのに。あの朝礼の後、すぐ私に頼みに来たんですよッ！」

彦一はカッとして考える余裕はなかった。経理部の自分の席に着き、向かいの机で始業前にゆっくり煙草を楽しんでいる村山係長に、

「係長、毎日女の子が小使室で泣いてるのを知ってるんですか？」

「そうか？　知らんね。何故なんだ？」

「知らん？　そんな馬鹿な。あなたが女子社員に掃除を頼んだんでしょうッ！　その上、いちいち揚げ足をとるそうじゃないですか。それほど女の子の掃除が気に入らないなら、自分でやったらどうなんですッ。女の腐ったような根性の悪い事をするなッ！」

村山は青ざめ、口をワナワナ震わせて急に言葉は出なかった。

「キ、キ、君はわしに何て事をッ！　これで済むと思ってるのかッ！」

「いいえ、思ってませんよ。僕は辞めますよ。いつまでも他人（ひと）の金を勘定する気はありませんからね。数えるなら自分の金を数えますよ。商売をして儲けてね……」

村山からは一句も出なかった。蒼白な顔で彦一を睨みつけるばかり。

「じゃあ、これで辞めます。給料は日割計算で送って下さい。短い間でしたが、お世話になりました」

鞄を肩に、彦一は会社を出た。午前十時を廻ったところだった。清々して口笛でも吹きたい気持ちだった。フト、《母に何と言おう？　来月からの生活費は？》と思った。でも、《商売をすれば何とかなるだろう。出来たことは仕方がない、クヨクヨするな》と打ち消した。が、不安は打ち消せなかった。「即断決行」――彦一の悪い癖だった。

## （十五）失　業

流石に母には辞めた事は言えなかった。翌日は気分が悪いと言って胡魔化した。仮病も三日が限度だった。四日目に母は、

「彦一、何かあったんじゃないの？　正直に言ってみなさい」

母は既に覚っていたようだった。これで三度目の失業だった。

「実は、係長と喧嘩して辞めて来た」

母の顔が急に暗くなった。

「辞めたのなら仕方ないけど、もう三度目よ」

低い声だった。彦一は首を絞められたように苦しかった。

「お母さん、僕商売をするッ！」

「商売？　どうして出来るのッ！　お金も経験もないのに……」

母は俯き、涙声になった。

「僕、前から思ってる事がある。有機肥料でね、綿の粉を売るんだ」

彦一は心配よりも、二十七歳という若さで独立する事を秘かに誇りに感じていた。商売の実態も知らずに。仲のよい友達の一人に、彦一は資金を頼もうと思った。しかし、いくら友達とはいえ、借金は言い出しにくかった。会話の中のどこで切り出すか？　そんな話題に関連した話は友達の間では出ることもなかった。言うか、言うまいか、彦一は焦った。高い所から飛び下りる気になって言った。

「実は今度、商売をするんだ。貯金があったら借りられないかなぁ？」

気持ちも声も滅入ってしまい、穴があったら入りたいほど恥ずかしかった。友達は警戒感を露わにし、

「安月給やから貯金なんてないよ」

ニベもない、冷たい返事が返ってきた。彦一は全身に水を浴びせられたように身がすくんでしまった。馬鹿だった、言うんじゃなかった――恥ずかしさと屈辱で、その場に居られず、サヨウナラも言わずに歩き出した。もう、金のことなど個人に言うべきではない。金のことは金貸しに言うしかない。彦一の夢は資金を工面するという難題によって最初から出鼻をくじかれた。借金することの余りの難しさと可能性のなさに、

独立を諦めるしかなかった。また、日銭でも稼ぐしかなかった。

二十七歳の若さでは、世の中の実情やお金の難しさなど想像もしてみなかった。彦一は改めて世渡りの難しさに直面したのである。暗い気持ちで、また履歴書を書いた。新聞広告を見て応募したり、親しい友人に頼んだりしたが、返事は不合格か、無しの礫（つぶて）かのどちらかだった。

煙草銭まで母には言えず辛抱したが、苦しかった。二日も煙草を吸わないと頭が呆けてきそうだった。そうなると気持ちも僻（ひが）んで、知人・友人にも会いたくなくなってきた。《また遊んでるのか？》と言われているよう思えてならない。昼は家にいて、夜になって風呂や本屋へと、なるべく人目を避けて行動した。まるでドブ鼠のように、こそこそ過ごす日々を送るのだった。

落ちぶれると気持ちまで卑屈になり、チャンと背広を着ないと、外出できなくなった。正装しないと、また遊んでいるのかと思われる。それが怖かった。

朝になると大抵の人達は、いそいそと職場に赴く。なぜ、自分だけ仕事がないのか。彦一は悲しくなる。だが、俺も男だ。男が泣けるものか、……。いっそ女に生まれて来ればよかったのだ。女なら泣いてもおかしくない。思いが暗い方へ暗い方へ向かうのをどうすることも出来なかった。

そんな時、友達の父から太洋毛織という会社を紹介された。天にも昇る気持ちで面接に行った。毛織物の営業部だが、とにかく商品を憶えてもらいたいと、倉庫係に廻された。彦一は感激し、三年で係長、五年で課長になってやろうと、倉庫で商品をノートに取って憶え、見本も集めて真剣に研究した。

倉庫に入って四ヶ月目、オーバー地を担いで首を痛め、左右にも上下にも首が動かなくなった。医者の診断書を出し、二ヶ月の間、家で養生した。八分くらいまで癒った所で、新入りが余り長く休んでも会社に悪いと早目に出社した。

労務課長は申し訳なさそうに、

「君は今の所、試用期間中なので、暫く自宅待機してもらいます。もちろん、失業保険の手続きをしますから」

彦一は呆然とした。体（てい）のいい馘（くび）ではないか。胸が煮えくり返ったが、紹介してくれた友人の父の顔もある。ややもすれば語気が強くなるのを押さえ、

「課長さん、これが違法であることは私でも判っています。紹介してくれたTさん（友人の父）の顔で、黙って辞めますが、こんなやり方では、この会社は発展しませんよ。まるで人も使い捨てで雑巾と同じじゃないですか。使えなくなると、すぐ捨てる。これじゃ、居れと言われても居れませんよ。安心して働けないではありませんかッ！」

これが最後の会社と頑張ったばかりに病気に。その病気も完治していないのに解雇とは、労基法では同一傷病が完治するまで解雇はできないのである。

言う事を言って門を出た彦一は、思わず涙がハラハラと頬を伝った。何故こうも俺には運がないのか。何処まで続く？　浪々の日々が、……。

当時は、まだ敗戦時の手榴弾や爆弾が海辺に漂着して、いくらでもあった。彦一は腹立ち紛れに弾薬を拾って来て会社の事務所へブチ込んでやろうか、と思った。秋の夕暮れは傷心の彦一に冷たかった。

（つづく）

# 昭和初期図書館幻想

塚原由紀夫

年末に地元の図書館から借りていた本と音楽ＣＤを返却してきた。本が４冊、ＣＤは３枚である。いつものことだが、一度に何冊借りてきても、一冊読めるかどうかで他の本は、ざっと頁をひっくり返しただけで、そのまま返してしまう場合が多いのである。わかっていながらいつも欲張って借りてきてしまう。

今回も、まともに読んだのは「富永太郎詩集」（思潮社）の一冊だけだった。富永は２４歳で夭折した詩人だから生前に残された作品もほんのわずかである。薄い詩集がそのまま彼の全集というべきもので日記や書簡なども残されたものは、ほとんどこの中に所収されているらしい。生前、中原中也、小林秀雄らと濃密な交流があった。富永は、この二人に決定的な影響を与えたと言われている。

私は透明な秋の薄暮の中に墜ちる。
戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いてはゐない。（「秋の悲嘆」冒頭）

次の年すなわち昭和元年に小林秀雄は次のような追悼文を書いている。

「おい、ここを曲らう。こんな処で血を吐いちや馬鹿々々しいからな」。僕は流竄（りゅうざん）の天使（堕天使、ランボーがそう呼ばれていた）の足どりを眼に浮べて泣く。彼は、まことに、この不幸なる世紀に於いて、卑陋（ひろう）なる現代の日本の生んだ唯一の詩人であつた。（「富永太郎」より）

返却日が近づいて、あわてて読み始めた一冊があった。河上肇の「自叙伝（上）」（岩波書店）である。これは面白そうで続けて読もうと思い期間延長を申し出て再度借りなおしてきた。

河上肇は明治末期から昭和の始めにかけて活躍したマルクス主義経済学者だったが、ご多分にもれず治安維持法にひっかかり投獄された。獄中５年。いわゆる転向して出獄してきたときは齢６０近かった。

転向とは権力に屈服したことであり、自他共に褒められた話ではない。以後、河上は故郷に帰り、戦争が終わるまでもっぱら当の自伝執筆に没頭していた。ふたたび共産党の活動に戻りたいと折々もらしていたこともあったらしいが、戦争が終わってまもなく亡くなった。河上肇の場合、転向する経緯がとても独特だった。思想を捨てろと迫る官憲との対決もムキになって抵抗する若い革命家の面影はない。たとえば小林多喜二などは最後の晩に「日本共産党万歳」と何度も叫んでいたというし宮本顕治の場合は何を聞かれても黙秘を通した。

河上肇の場合は、いささか様子が違っていたようだ。どんな場面にいたっても無益な意地を通したり「革命的」大言壮語をわめくような気配はまったくない。のらりくらりと言い逃れて官憲を煙にまき妥協するところは妥協して結局、牢から出てきてしまったように思われる。白か黒かと即断できないまま、ついつい年月を重ねてしまうというのも人生の実際だろう。紆余曲折に満ちた心理的経緯こそ自叙伝の核心である。河上は自分について、謙遜しぼやくことおびただしい。これが隠し味となって彼の思想と文章に深みをあたえ、ひょうひょうとして老成を遂げた人柄に隠された学問への情熱と人情がしのばれてくる。

・中学校でも高等学校でも大学でも、私は嘗て首席をしめたことのない人間である
・私はもちろん駿馬というには縁遠い人間である
・鈍根である私の身にとって、いかにも相応しいものに思われる
・なるほど私はむらの多い人間であろう

等々とうとう。

# 創作民話　おっかあと牛

蒲原　ユミ子

むかし、若いおっかあが広い田んぼを一人でやっていたんだ。

おっとうは娘のシズが生まれるとすぐ亡くなったからな。けど、じちゃがいてくれるすけ（から）、牛の世話や家のことはやってくれる。

おっかあは朝早くから暗くなるまで、田んぼの中、這いずりまわっていっしょけんめい稲の世話をしてたんだ。

隣にもおっかあがいて、やはりおっとうがいなくて一人で田んぼをやっていた。

こっちのおっかあは器量よしで息子のカズがいたが、じちゃもばちゃもいなかった。それで、なにもかも一人でやらなけりゃあならんすけ（から）、大層だった。カズはシズより２つ年上で一所懸命おっかあの手助けをしていたが、子どもだからたいしたことはできなかったよ。だから、隣のおっかあはくるくるとこまねずみのように働いていたって。

村の衆は隣のおっかあの方を、「働き者で器量よしだ」とほめることが多かったな。

だから、若いおっかあはおもしろくなくて、隣のおっかあに気いゆるして口をきくことはなかったんだ。

けど、子どものシズとカズは仲がよくて、手伝いのない時はいつも２人で田んぼ道や山で遊んでいたんだよ。

ある秋の日。

おっかあは年貢の米俵を長者さまのところへ持っていこうとした。荷車に米俵を５俵積み、牛を引いてきて梶棒を荷車に取り付けた。牛の手綱はじちゃが引くんだ。荷車の中にはおっかあが入って引っぱる。

きょうは気持ちよく晴れ渡り、キーッキーッと鳴いた百舌（もず）の声が、秋空に吸いこまれていったよ。

じちゃがよたよたと牛を引いていく。長いことじちゃが世話してきた牛だからな、年取っても、おたがいの気持ちはよく通じているんだ。おっかあも調子よく荷車の梶を取っていたよ。

もう少しで長者さまのお屋敷という曲がり角に来た時だ。

突然、犬が飛び出し、

ワワア～ン、ワ～ン！

と吠え立てた。

牛はたまげて、

モオオオッ！

と悲鳴をあげ、前足を高く振り上げたかと思うと、猛然と走り出した。じちゃは転げて手綱を放してしまった。牛と荷車はしっかりつないであるし、その中にいるおっかあは逃げる間がなくて牛といっしょに走るしかなかった。

走って、走って、走って、走って・・・

まわりの景色は矢のように過ぎていく。どこをどう走っているか、見るどころではない。

おっかあの足は、めまぐるしく自分の足でないようにはやく動いていた。

おっかあは、もう倒れて荷車に轢かれてしまうかと思った

時だ。
　ちょうどわき道からやって来たよそのとっつあんが、牛の行く手に立ちはだかり両手を広げて通せんぼした。
　すると、やっと牛はとっつあんのすぐ前で止まった。
　おっかあはへなへなと地べたに尻ぺたついた。
　よそのとっつあんは白髪混じりで年取っていたが、おっかあが元気を取りもどすのを待っていてくれた。そして、長者さまのとこまで牛の綱を引いてくれたんだよ。
　牛はたまげると暴走してしまうんだな。それで、見知らぬ者同士、通せんぼしてくれたもんだよ。

　また、若いおっかあはいっしょけんめいはたらき続けたよ。
　春になって田植えが始まろうとしていたころだ。山はゼンマイの時期がおわり、ワラビが丸めた拳（こぶし）を開くように頭をもたげだしていた。おっかあはワラビ採りが大好きであったが、そんなことしてるひまはなかったな。
　夕方、おっかあはくたくたになって田んぼからもどったが、家に娘のシズがいない。このごろはご飯仕事（しごと）もやるようになったというのに、まだ何の用意もできていない。じちゃは年を取り、体のあちこち具合が悪くなって寝ていたしな。
　おっかあは、（シズは大川にでも落ちて流されたのだろうか）などと心配した。
　隣のおっかあとはふだんしゃべっていないので、いつもシズといっしょのカズは帰っているかどうか、聞きにも行きにくい。
　いくら待ってもシズは帰ってこない。おっかあは心配でたまらず、隣の家の様子をそうっと見に行った。明かりはついているが、カズの声は聞こえない。
　２人で山の中にでも迷ってしまったのだろうか。水を持って探しに行こうか。けど、こんなに暗くなった山は危なくて、とても一人じゃあ探しきれない。村の衆にたのもうか。いやいや、みんなに大騒ぎさせるのも恥ずかしいしょうしいし。

　あたりはどんどん暗くなるばかりだ。おっかあは心配で心配でたまらなくなり、とうとう一人で水を持って家の前の山道を登っていった。
　十三夜の月が山道を照らしてくれ、何かにつまずくこともなく歩くことができた。
　村の墓地に近づいた時だ。向こうから白いものがやって来る。おっかあはどきっとした。
　暗がりの道を逃げるわけにもいかず立ち止まった。
　近づいてきたのは、隣のカズだった。しかも、背中にシズを負ぶっている。おっかあはほおっと安堵したけど、ぐったりしているシズを見てかあっとなり、叫んだ。
（何したんだ）
「なあしたがーと」
　カズは黙っている。口がきけないくらい疲れているようだったな。おっかあがシズを抱き取ってみると、シズはずぶ濡れで体が冷たかった。暗がりだけど、よく見るとカズも泥だらけだ。おっかあはたまらずにカズを責めてしまった。
「なあしたがーと。年上のおまさん（おまえさん）がついていて！」
　けれど、カズは黙ったままよろよろと山を下り家に帰っていった。おっかあはシズをしょ

って家に駆けもどり、大急ぎで風呂を沸かしてシズを入れた。

やっと血の気がもどり元気になったシズは、ぽつりぽつりと話し始めた。

「おら、ワラビとりにむちゅうになって・・　がけから谷川へ落っちゃったんだあ。で・・カズちゃんがやっとこさ、がけから下りて助けてくれたんだわ・・」

おっかあは、（しくじった！）と深く後悔したよ。大事なシズを命がけで助けてくれたというのに、あんなふうになじってしまったからな。

それに、カズはもともと気立てのいい子だ。このごろはぐんぐんでっかくなって、田んぼ仕事を一所懸命手伝って、隣のおっかあが羨ましいくらいだったしな。

けれど、次の日もずっとおっかあはカズに謝らないでしまった。

なんとなく、きっかけがつかめなかったんだ。田植えも始まって忙しくてせいもあったかな。カズも手伝いが大忙しだったしな。

シズも、あれから田んぼ仕事をどんどん手伝うようになった。２人で遊ぶ暇もないほどだった。

なにしろ、稲がずんずん育ってな。稲は、「オラのめんどうみろ、めんどうみろ」って緑色に揺れておっかあを呼ぶんだよ。

また、稲は正直で、めんどうをみればみるほどみごとに育ってくれるんだな。

田植えが終わると、田の草取りで泥田の中をはいずりまわる。一日中腰を曲げているので、腰が痛くて痛くて、腰をもいでしまいたいくらいになるんだよ。

そして、夜は布団にもぐりこみ、おっかあもシズも泥のように眠ったな。

隣のおっかあとカズもそうだったろう。

また、年貢納めの秋がやってきた。

おっかあが稲刈り鎌を持って晩生（おくて）の稲が植わっている田んぼに向かっていたときだ。

向こうから荷車をつけた牛がまっしぐらに走ってくる。よくみると、隣のおっかあが荷車の中で走っている。このごろは、カズが牛の手綱を引くようになったが、隣の牛もなんかにたまげたのだろう。もちろん、カズの姿はない。近くによそのとっつあんは誰もいなかった。

牛はどんどん近付いて来る。

おっかあはおっかなくて死ぬ思いだったが、鎌を持ったまま道の真ん中にぐいと出た。そして、両手を広げ、ぐわっと牛をにらみすえ、通せんぼした。

牛はおっかあの一尺（約３０センチ）前でやっと止まった。

空がぬけるように青く広がった中、おっかあはくたりと道に崩れそうになったが、気い張って牛の手綱をぐいとつかんだ。荷車の中では、器量よしのおっかあが地べたにぺたんと尻ぺたついてたよ。

それからも、２人のおっかあは特におしゃべりするでもなかった。なにしろ、田んぼがいそがしかったからなあ。

けど、牡丹餅（ぼたもち）とか作ったら、シズやカズが互いの家に運んだって。

いちご、ぶらあんとさがった。